リレー連載

編集委員の目

●第12回

# 「教育と医学」とアドボカシー

満留昭久

「アドボカシー」という耳なれない言葉が、わが国の小児科医の間に広がりはじめたのは、いつごろからだったのでしょうか？　アメリカではかなり古くからこの言葉は使われており、医療だけでなく他の分野でも日常的に使われていると聞きます。アドボカシー（advocacy）に対する適当な日本語はみつかりません。「誰かの味方をする」、「権利を擁護する」、「ある主義主張を唱導する」などが辞書的な意味になるそうです。

したがって、アドボカシーとは「ある人の味方となって、その権利や利益を守るために闘うこと（李啓充）」であり、また「ある考えや政策を、自分のためにうまく言い出せない人たちのために、別の人が声を大にして外部に訴える行為（Katcher）」であると言うことができます。

## 日本での展開

日本看護科学学会は一九九六年に「当事者のアドボカシーと看護」というシンポジウムを企画しました。また小児医療に携わる人たちの中からも、このアドボカシーという考え方をもっと知ろうという声が大きくなってきました。そして日本外来小児科学会は、二〇〇〇年の年次学術集会の

メインテーマに「アドボカシーの時代へ―提言し行動する小児科医」としました。

これにはアドボカシーという言葉を理解し、子どもたちのために、子どもたちに代わって提言し、行動する小児科医になろうとする主催者側の思いがこめられていました。

Katcher博士は日本の学会に呼ばれ、「小児科医とアドボカシー」という題で特別講演されました。江原氏が訳した講演の内容をあらためて読んでみると、アメリカの小児科医の考え方を知ることができます。博士は、〝われわれ小児科医はアドボカシーという意味では特別な立場にある。医師として、教師として、また専門家として、自分で言えない、訴えられない子どもたちのために、子どもたちの医療、発達、あるいは保護について代弁する立場にある。そして小児科医は診療所での診療の立場を越えて、外に向かって子どもたちのために声を大きくして訴えることができる〟と強調されました。

**満留昭久**(みつどめあきひさ)
福岡大学医学部小児科学教授。教育と医学の会編集委員。医学博士。専門は小児医学。九州大学医学部卒。著書『ベッドサイドの小児の診かた(第2版)』(編著、南山堂、2001年)、『小児神経学の進歩30集』(共著、診断と治療社、2001年)など。

博士は小児科医のアドボカシーの実践の場として、①診療所での活動、②地域での活動、③国レベルの活動を挙げ、国レベルの活動の例としてアメリカ小児科学会のアドボカシー活動を紹介されています。学会の事故対策委員会が"The Injury Prevention Program"というパンフレットを年齢ごとに作成し、これを直接会員から患者さんの両親に手渡すようにしました。また乳児突然死症候群がうつ伏せ寝に多いというエビデンス(根拠)と、アメリカではうつ伏せ寝が多く乳児突然死症候群も他国に比べて多いという事実から、学会は「仰向け寝プログラム」を作り、小児科医に仰向け寝をさせるよう指導することを勧告しました。その結果、乳児突然死症候群の発生が急激に低下し、学会のアドボカシーの成果であるとのべておられます。

このKatcher博士の講演は、わが国の小児科医

特に開業小児科医に大きな影響と勇気を与えてくれたと思われます。二〇〇〇年にはさっそく外来小児科学会の中にアドボカシー委員会を設立し、具体的な活動を始めました。シンポジウムの開催や事故防止に関する政府への要望書の提出など活発な歩みを始めています。

アドボカシーという考え方は、現在、小児医療だけでなく、広く医療の世界に広がってきています。例えばマサチューセッツ総合病院には「患者アドボカシー室」という特別の部署があり、そこに専任の人をおいて、患者さんからの苦情を受け付け、調査を行ったりして対応する、あるいは医療者からの相談も行っています。わが国でも「アドボカシー室」を設ける病院が少しずつ出始めました。今後もいろいろな方面でこのアドボカシーという言葉は耳にするようになると思います。

## 『教育と医学』のマインド

さて本誌『教育と医学』は昭和二十八（一九五三）年に設立された「教育と医学の会」の機関誌として同年第一号を世に出して以来、毎月欠けることなく発行され、今日すでに六二八号を数えております。九州大学の教育学部、医学部の教授たちが、お互いにコラボレートすることで、子どもたちの健康や教育を考えていこうというのが、設立の目的の一つであったろうと思われます。

「教育」と「心理」と「医学」のコラボレーションにより、子どもたちをどう育てていけばよいか、それぞれの時代に即した教育はどうあるべきか、家族の在り方、真の健康とは何か、などなどまさしくアドボカシー的マインドを持って編集会議では議論され、それが毎号の「教育と医学」の特集テーマとして組まれてきたということができるのではと考えられます。すなわち、「教育と医学」は知らず知らずの間に、アドボケイト（アドボカシーを実践する人、権利の擁護者）としての役割を果たしてきたということができます。

アドボカシーという言葉がなかった五十三年前の「教育と医学」の編集者たちの気概に思いをはせるとともに、「教育と医学」の存在意義をあらためて考えているところです。